



Y-1, 2号住居址とM-2号溝状遺構 (東方より)



Y-1号住居址 炉



Y-1号住居址
土器 (No.9) 出土状態



Y-1号住居址出土土器



Y-2号住居址出土土器

浅科村文化財調査報告 第13集

原 遺 跡

2001

浅科村教育委員会

例 言

- 1 本書は、長野県浅科村所在の原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、浅科村土地開発公社の委託を受け、浅科村教育委員会が実施した。
- 3 本発掘調査の概要については、第1章に記してある。
- 4 本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。
 - ◎ 遺物復元 神蔵惇子、砂連尾恵美子、中込輝子
 - ◎ 遺物実測 鳥居 亮
 - ◎ 遺物拓本 神蔵惇子、砂連尾恵美子、中込輝子 行田裕子
 - ◎ 遺物トレース 荻原えり香、鳥居 亮
 - ◎ 遺構トレース 荻原えり香
 - ◎ 遺構写真 鳥居 亮
 - ◎ 遺物写真 鳥居 亮
 - ◎ 遺物観察表作成 鳥居 亮
 - ◎ 版 組 み 行田裕子
- 5 本書に使用した航空写真は朝日研コンサルが撮影したものである。
- 6 本書の執筆分担については、文責を目次に明記してある。
- 7 本書の編集は、浅科村教育委員会の責任のもとに、鳥居亮がおこなった。
- 8 本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々から貴重な御助言・御配意を得た。厚く御礼申しあげる次第である。(敬称略)
小山岳夫、堤 隆

凡 例

1 遺構の名称

Y→弥生時代竪穴住居址 H→平安時代竪穴住居址 D→土坑

M→溝状遺構

2 挿図の縮尺

竪穴住居・掘立柱建物・土坑=1:80、炉=1:40、溝状遺構=1:100、1:200

土器=1:4。石器=2:3、1:3、1:4

以上が基本的なものである。これ以外のもも含めて挿図中にその縮尺を明示してある。

3 図版の縮尺

遺構写真の縮尺については統一されていない。

遺物写真の縮尺については、挿図と同一である。

4 遺構面積の計測にはプランメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

5 出土遺物一覧表<土器>の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、-は不明、()は推定値を示す。単位はcmである。

6 出土遺物一覧表<石器>の法量は、-は不明、それ以外は現存値を表わす。単位は、mm・gである。

7 遺構の層序説明は本文中に記した。

8 土層の色調、遺物胎土の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

9 挿図中におけるスクリーントーンは以下のものを表わす。

(1) 遺構

遺構断面=斜線 ただし、切り合いによる破壊部分は斜線を逆方向にした。

貼り床=網

(2) 遺物

土器赤彩面=網

石器使用痕等磨減範囲=網

目 次

例 言
凡 例
目 次

I	発掘調査の概要	鳥居 亮	1
(1)	発掘調査に至る動機	"	1
(2)	発掘調査の概要	"	2
(3)	発掘調査の経緯	"	4
II	遺跡の環境	峯村今左夫	5
(1)	遺跡の立地	"	5
(2)	歴史的環境	"	5
(3)	層 序	鳥居 亮	9
III	遺構と遺物	"	10
(1)	Y-1号住居址	"	10
(2)	Y-2号住居址	"	17
(3)	土 坑	"	22
(4)	溝状遺構	"	23
IV	ま と め	"	26

Ⅰ 発掘調査の概要

(1) 発掘調査に至る動機

長野県北佐久郡浅科村大字塩田字原において、浅科村土地開発公社による宅地開発事業が計画された。この地区には周知の遺跡の原遺跡が存在しており、開発に際してはその破壊が余儀なくされた。このため、原因者である浅科村土地開発公社と浅科村教育委員会の間で原遺跡の保護



第1図 原遺跡発掘調査地点(網点)と周辺の遺跡分布(1:15,000)

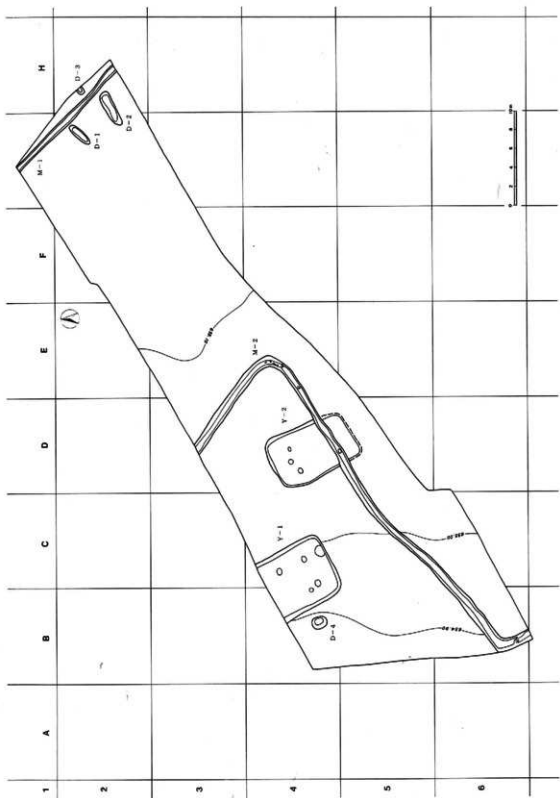
協議がもたれ、先ず試掘調査を実施して遺跡の概況を知ることが先決ということになった。平成12年4月19日に試掘調査を実施した結果、遺構・遺物が確認されたため、同年5月8日より本調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

(2) 発掘調査の概要

- 1 遺跡名 ^古原遺跡
- 2 所在地 長野県北佐久郡浅科村大字塩名田字入道
- 3 発掘期間 平成12年5月8日～平成12年6月30日
- 4 整理期間 平成12年9月1日～平成13年3月31日
- 5 発掘理由 平成12年度浅科村土地開発公社による宅地開発事業に伴い、原遺跡の破壊が予想されるため緊急発掘調査を実施して記録保存を行う。
- 6 事務局 社会教育係 山岸明雄、高野吉章
- 8 調査体制
- 担当者 鳥居 亮
- 調査員 小泉政志 峯村今左夫
- 補助員 神藏惇子 砂連尾恵美子 中込輝子 行田裕子 荻原えり香
- 協力者 佐藤美ち子 佐藤滝江 中嶋次代

第1表 検出された遺構

時代	竪穴住居址	溝状遺構	土 坑	計
弥 生	2	0	0	2
不 明	0	2	4	6
計	2	2	4	8



第2図 原簿跡全体図 (1:400)

(3) 発掘調査の経緯

平成12年度

5月8日

重機による表土削平開始

5月9日

遺構の調査開始

5月12日

Y-1号住居調査開始

5月23日

Y-1号住居調査終了

5月24日

Y-2号住居調査開始

6月1日

Y-2号住居調査終了

6月7日

航空写真撮影

6月13日

発掘調査終了

6月14日～平成13年3月31日

遺物整理。報告書作成。

3月31日

発掘調査報告書刊行



第3図 表土削平とプラン確認



第4図 作業風景



第5図 住居址実測作業



第6図 土器復元作業

II 遺跡の環境

(1) 遺跡の立地

浅科村は、北佐久郡内の西方に位置し、東は佐久市、西は望月町、北御牧村、北は小諸市と隣接する村である。地形的には中央部に粘質土壌からなる平坦地が広がり、西には蓼科山塊からの延びた尾根が御牧原台地へと連なっている。中央部の東は底地帯となり、甲武信岳に発する千曲川が、佐久平の中央部で大きく蛇行して浅科村に入り北流している。原遺跡は、この千曲川が北流する右岸の塩名田地区上位段丘上の台地上にあり、標高655mを測る。南には蓼科山、北に活火山の浅間山が眺望できる。

(2) 歴史的環境

浅科村における遺跡は、村内を流れる千曲川、布施川両河川の段丘面及び御牧原台地に分布している（第7図・第2表）。以下時代を追いその遺跡を概観する。

縄文時代

御牧原台地南嶺八幡山山系の南麓、布施川段丘一帯から勝坂式、加曾利式、堀之内式等の中・後期の土器片が表採されている。また千曲川へ合流近くの布施川右岸土合遺跡では、北陸新幹線関連で平成4年に発掘調査が行われ、その敷地内から縄文時代の竪穴住居址1軒、土坑3基が検出されている。同時にその地続きの土合遺跡を、浅科村教育委員会が試掘調査を行い、縄文時代前期から中期集落が確認された。御馬寄地区の中ノ平、田中島遺跡からは中期から後期の土器が多量に出土している。千曲川右岸段丘舟久保では、敷石住居址1軒と加曾利式、堀之内式、安行式等の出土がある。また舟久保の北裏一段下った海戸田遺跡では、平成10年浅科村保険センター建設地の発掘調査で、縄文時代の柄鏡形敷石住居址5軒、屋外埋甕5基、土坑10基が確認された。

弥生時代

平成6年、新幹線関連の土合遺跡発掘調査で、その敷地内から弥生時代の竪穴住居址が1軒検出された。千曲川左岸の御馬寄の田中島遺跡では、弥生時代後期と推定される方形周溝基3基が確認されている。そのほか砂原・上ノ平・入の沢・明神平・須釜原・上屋敷遺跡の各地から後期の箱清水式土器の出土が借遺史料等にみられるが、遺物等は残っておらず詳細は不明である。

古墳時代

古墳時代には須釜原で渡来人達により馬の飼養が始められ、これはやがて信濃最大の勅旨牧である望月牧へと発展していく。須恵器の製作も盛んに行われ、浅科村遺跡詳細分布調査表（平成10年作成）では、第1号から第14号までの窯跡が報告されている。この頃古墳の築造も始まる。八幡地区の兜山山頂には古墳が二基並んでいるが、山頂部の古墳ということから6世紀後半の年代が推定される。村内で最も古い古墳といえよう。この周辺に古墳時代から平安時代にかけての集落が点在していたことであろう。矢島地区の山中にも茨尾根古墳がある。矢島地域にも古墳時代の集落が展開したことをうかがわせる。7世紀後半になると平地にも古墳群が出現する。布施川左岸段丘に入ノ沢古墳群並び唐沢古墳である。これらの古墳は望月牧に関わりがあるのであろうか。また布施川右岸段丘にも土合古墳群が形成されている。土合第1号古墳からは円頭把頭、八窓倒卵形の銀象嵌鐔、鍔、馬具、轡、金環、玉類、須恵器等多数出土している。また隣接の久保畑古墳（現在土合第6号墳に改名）からも頭椎柄頭その他が出土している。出土遺物の内容からこちらの古墳は古東山道に関わりがあるように思える。

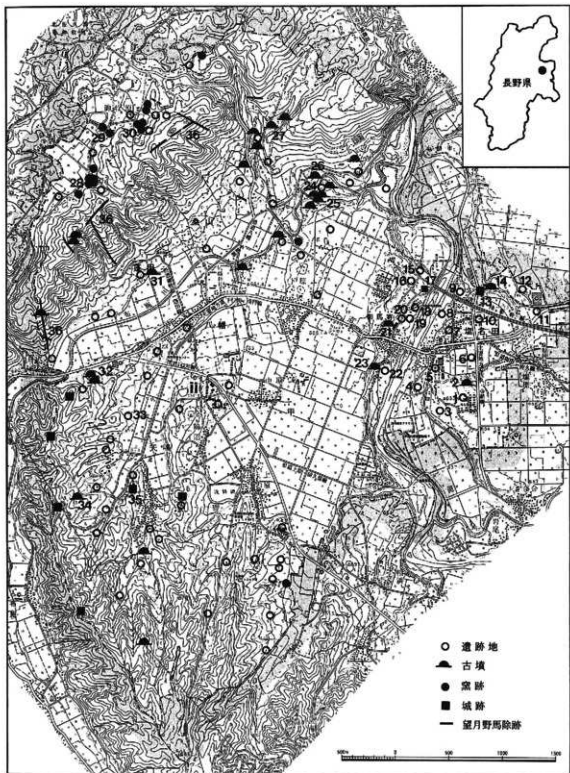
塩名田地区の字洞口にも古墳が1基築造されている。平成6年新幹線関連の発掘調査では、砂原遺跡地表下約2mから古墳時代の竪穴住居址が30軒確認された。これは新幹線敷地内だけの数であり、これに隣接する地域にも相当数の住居址のあることは確実で、この地帯には大きな集落のあったことを思わせる。洞口古墳はその所在場所から見て、この住居跡集落と関わりのある首長等の墳墓であろうか。この砂原遺跡から少し南へ離れた海戸田遺跡からも、古墳時代前期の竪穴住居址3軒が検出されている。

奈良・平安時代

勅旨望月牧先蹤の地と目されている須釜原宇尾尻から昭和初期「鉄鐘」が出土し、現在国重要文化財に指定されている。鉄鐘の研究者坪井良平氏はその鑄造年代は平安初期と比定する事が最も妥当なところと「信濃」に記載している。砂原遺跡新幹線関連の平成6年に行われた発掘調査では、塩名田地区から平安時代の住居跡と畑・田・小川用水路がセットで見えられている。また平成7年の蓬田寺田遺跡発掘調査でも、平安時代の住居址5軒が確認された。平成9年八幡地区の大平遺跡発掘調査では、平安時代の住居跡24軒が検出されている。また平成10年の海戸田遺跡発掘調査でも竪穴住居址3軒が報告されている。

中世

矢島地区は、鎌倉時代以降武将の居城地であった。鎌倉時代から南北朝時代前半は、滋野氏一族が城主となって八島氏を名乗り、後半から室町時代は岩村田の小笠原大井氏の一族が替わって



第7図 浅科村の遺跡分布 (1 : 35,000)

第2表 遺跡名一覧表

№	遺跡名	所在地	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	備考
1	原	塩名田字原・入道	○	○	○	○		
2	原古墳	塩名田字原			○			燬滅
3	舟久保	塩名田字舟久保	○		○	○		
4	川端	塩名田字川端・上川原	○			○		
5	海戸田A	塩名田字海戸田	○					平成10年発掘調査
6	海戸田B	塩名田字海戸田		○		○		
7	屋敷裏	塩名田字屋敷裏				○		
8	下川原	塩名田字下川原				○		
9	砂原	塩名田字砂原	○	○	○	○		平成4年発掘調査
10	山王	塩名田字山王・初坪				○		
11	新町A	塩名田字新町	○			○		
12	新町B	塩名田字新町				○		
13	五領城跡	塩名田字岩下・割口					○	主郭は小諸市分
14	淵口古墳	塩名田字岩下			○			
15	中平	御馬寄字中平				○		
16	田中島	御馬寄字田中島	○	○	○	○		平成6年度発掘調査
17	御馬寄城跡	御馬寄字田中島					○	
18	下平	御馬寄字下平				○		
19	熊野	御馬寄字熊野				○		
20	上平	御馬寄字上平		○		○	○	
21	上平の塚古墳	御馬寄字上平			○			半壊
22	神平	御馬寄字神平	○			○		
23	上ノ山古墳	御馬寄字上ノ山			○			半壊
24	土合	甲字土合	○			○		
25	土合古墳群(1~5号墳)	甲字土合			○			昭和44年・平成4、5年発掘調査(1号古墳)2~5号墳は燬滅
26	土合第6号古墳	桑山字久保田			○			燬滅「久保畑古墳」を改名
27	入の沢古墳群(1~5号墳)	桑山字入の沢・姥ヶ沢			○			燬滅
28	須釜原第2竈跡群(1~5号竈跡)	蓬田字尾尻				○		燬滅
29	須釜原第2竈跡群(11・12号竈跡)	蓬田字須釜				○		燬滅
30	須釜原第2竈跡群(6~10号竈跡)	桑山字御牧原農園・向原				○		燬滅
31	唐沢古墳	蓬田字唐沢			○			昭和49年発掘
32	兜山古墳(1・2号墳)	蓬田字鳥久保			○			現存
33	大平	八幡字大平・狐山・平	○			○		平成9年発掘調査
34	茨尾根古墳	矢島字茨尾根			○			
35	矢島城跡	矢島字城平・下屋敷・中屋敷・西久保・上屋敷					○	
36	望月牧野馬跡跡							

城主となり、大井矢島氏を名乗っていた。文明16年(1484)、村上氏に攻められて岩村田の大井宗家が滅亡すると、間もなく大井矢島氏の情報もなくなる。その後矢島十二頭出羽国移住伝承があって、今の秋田県由利郡に矢島町が形成されている。落合新善光寺は、塩名田地区の字入道の地籍にあったといわれている。大井光長が、落合新善光寺三尊像を鑄造したのが寛元2年(1244)で、それから35年後の弘安二年に銅鐘を寄進している。武田晴信は天文17年(1548)に佐久へ攻

め入り、佐久の諸城を陥れた。この時城主大井氏だった岩尾城も攻略されて、岩尾大井氏の氏寺新善光寺も襲われた。この時銅鐘は略奪されて、武田晴信は信仰していた松原神社まで運んで「野ざらしの鐘」となっている。

近 世

江戸時代初期寛永4年(1627)上州南牧羽根沢の豪族市川五郎兵衛は、蓼科山から用水路を作り、浅科村中央部の粘性の強い平坦地を開発水田地帯とした。現在五郎兵衛米の産地となっている。

(3) 層 序

I層 耕作土層

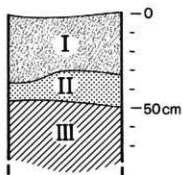
黒色土(10YR2/1)。層厚40~50cm前後。

II層 漸移層

によい黄褐色(10YR4/3)。ローム粒子を多く含む細粒パミスをよく含む。層厚10m前後。

III層 ローム層

黄褐色(10YR5/6)。5~10mm前後のパミスをよく含む。



第8図 原遺跡の基本層序

III 遺構と遺物

(1) Y-1号住居址

住居址 第9図

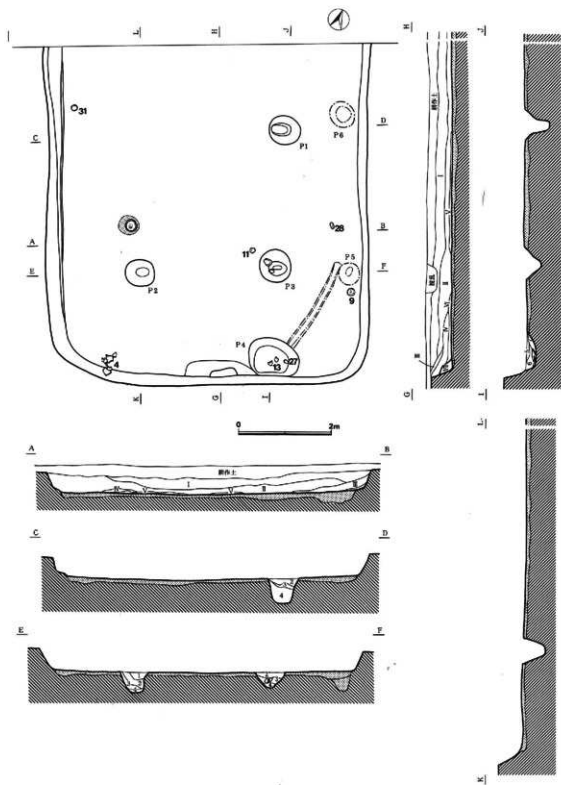
Y-1号住居址はB・C-4グリッドにおいてその2/3が検出された。北側は調査区外にあるため未調査である。本址は東西6.9m、南北7.2m(調査部分)を測る。北側が未調査のため全容は知り得ないがおそらく隅丸長方形を呈すものとおもわれ、調査部分の床面積43.1㎡を測る大形住居である。床面は貼り床であり壁溝は認められない。長軸の方位はN-28°-Wを指す。壁の残存高は35~50cmを測る。ピットは4個検出された。P1~P3が支柱穴と考えられ、方形に配置されるとおもわれるが、北西部は精査したがピットは検出できなかった。P4は貯蔵穴状のピットと考えられる。P1は70×60×50cm、P2は60×56×44cm、P3は66×66×36cmを測る。いずれも平面形は床面では円形だが底部は東西に長い楕円形を呈する。P4の平面形は楕円形で110×80×20を測る。また南壁中央にはステップ状の施設が設けられていた。これはその位置から入り口部に関する施設とおもわれるがその上面は固く締まる等の様子はみられず機能は不明である。この他、貼り床下からはピット2個(P5・P6)の他P4とP6を結ぶ溝状の掘り込みが確認された。

住居覆土は7層に分層された。I層はロームを少量含む黒褐色土(10YR2/3)、II層はロームと小粒(5~10mm)の軽石をよく含む褐色土(10YR4/4)、III層はロームを多量に含む暗褐色土(10YR3/4)、IV層はロームをブロック状に多量に含む明黄褐色土(10YR6/6)、V層は炭化材を含む粘性のある黒色土(10YR2/1)、VI層はロームを良く含む粘性のあるふい黄褐色土(10YR5/4)、VII層はロームを主体とする黄褐色土(10YR5/6)で南壁中央に設けられたステップ状施設の構築土である。

ピットの覆土は7層に分層された。1~4層は支柱穴の覆土で1層はロームを含む黒褐色土(10YR3/2)、2層はロームを多量に含むふい黄褐色土(10YR4/3)、3層はロームを少量含む黒褐色土(10YR2/2)、4層は多量のロームをブロック状に含む褐色土(10YR4/4)である。5~7層はP4の覆土で、5層は黒色土(10YR2/1)、6層はロームを多量に含むふい黄褐色土(10YR4/3)、7層はロームと炭化材を少量含む黒褐色土(10YR2/3)である。

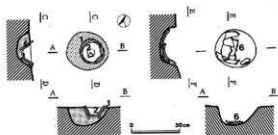
炉 第10図

炉は南西部のP2の北側に設けられる。地山を45×40×20cmの円形に掘り込み、No5の甕の破片を敷き詰め、No1・2の甕を胴部で上下に分割し上半部(No1)を、口縁部を下に向け設置しその内側に下半部(No2)を重ねるように設置している。本炉址の覆土は2層に分層された。I



第9图 Y-1号住居址 (1:80)

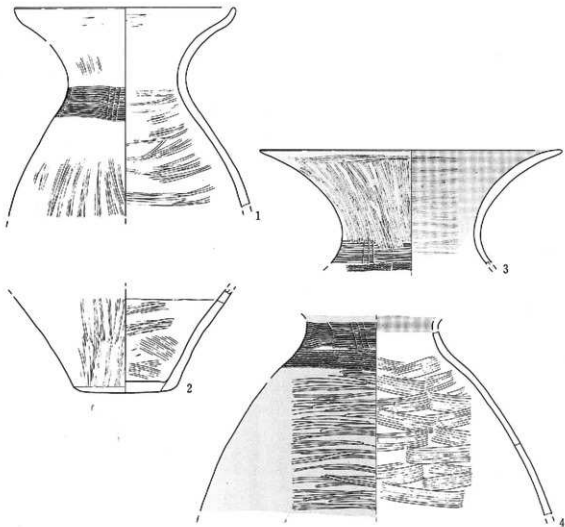
層はロームをブロック状に含み、炭化材を多く含む (10Y R5/4)、II層は人為的な埋土で焼土を少量含む、炭化材を多く含む黒褐色土 (10Y R2/2) である。また北側中央P1の西側には床面に焼け痕が認められたが掘り込み等は確認されなかった。



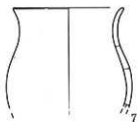
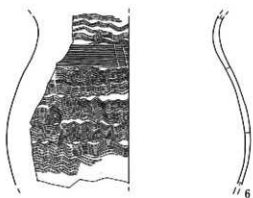
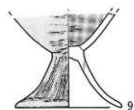
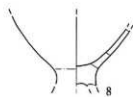
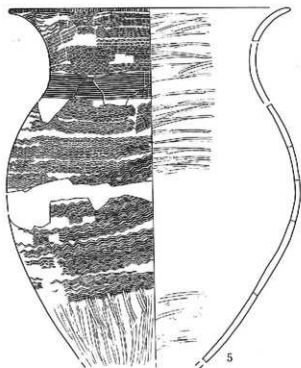
第10図 Y-1号住居址炉 (1:40)

遺物 第11~14図・第3・4表

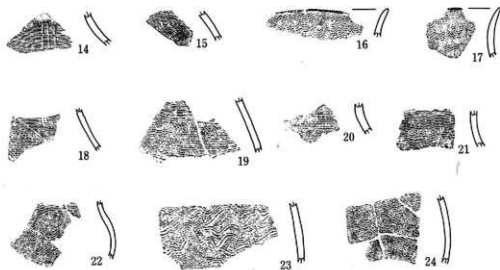
総合的に出土量は少ないが、土器は壺・甕・高杯・鉢など当期の弥生土器組成をほぼ満たして



第11図 Y-1号住居址出土土器 (1:4)



第12圖 Y-1号住居址出土土器(1:4)



第13図 Y-1号住居址出土土器拓影図(1:4)

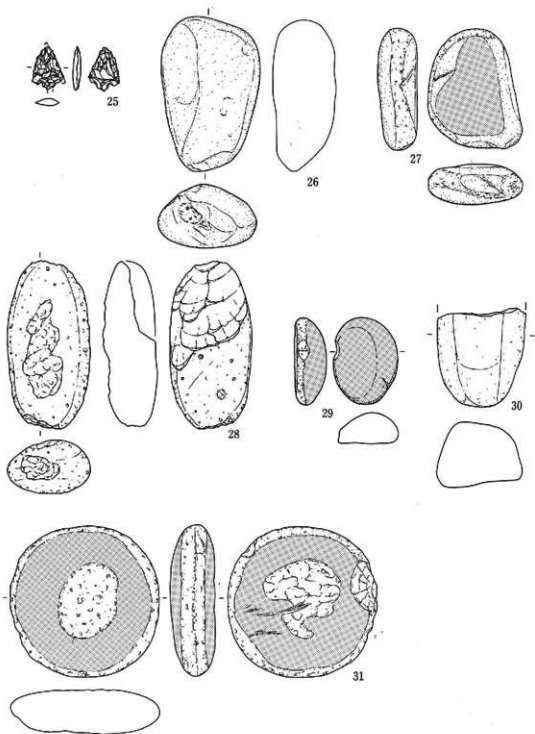
いる。図示した土器は13点、拓影図は11点である。いずれも弥生時代後期の土器の特徴を示している。No1・2およびNo5は前述したように炉址に用いられていた。なおNo5の破片はこの他P4および住居址全体に散乱していた。P4からはNo13の鉢とNo27の敲石も出土している。No9の高杯は南東の壁際から床面に置かれた状態で出土した。No28の敲石とNo31の磨石もそれぞれ床面上から出土している。この他図示した遺物はほぼ床面および貼り床中から出土しているが、No4の壺は破片が南西の壁際でIV層上面に流れ込むように出土した。

壺は受け口 (No1) と単口縁 (No3) があるがいずれも胴部が膨らむ特徴がみられる。文様は頸部に簾状文を持ちNo3・4はその簾状文の下に振幅の浅い波状文が施され口縁部と胴部に赤色塗彩がなされている。甕は単純口縁で胴部中位が膨らむ。文様は口縁部から胴部にかけて櫛状波状文が施され、後に頸部に簾状文が施される。高杯および鉢はいずれも赤色塗彩がなされる。拓影図 (第13図) のNo14・15は壺の頸部で簾状文とその下位に振幅の浅い波状文が施された後口縁部と胴部に赤色塗彩がなされる。No16~24は甕で頸部に簾状文、口縁部と胴部に波状文がみられる。

石器は黒曜石製の石鏃と叩き石・磨り石等が出土している。

時期

土器様相から本址は、弥生時代後期後半に帰属すると考えられる。



第14图 Y-1号住居址出土石器 (25=2:3, 他は1:3)

第3表 Y-1号住居址出土土器観察表

押出番号	機種	法量	器軽の特徴	文様および調整	備考
1 (完)	壺	23.5 — —	口縁部は強く外反し、受口状口縁。	外面—ヘラミガキ。頸部に三連止め帯描簾状文 内面—横方向のナデ	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R6/4)
2 (完)	壺	10.8	下位は若干換れる	外面—縦方向のヘラミガキ 内面—ヘラツズリの後ヘケ目調整。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R6/4)
3 (回)	壺	(32.5) — —	口縁部は強く外反する。	外面—頸部に三連止め帯描簾状文、その下位に振幅の浅い波状文。口縁部赤色塗彩、縦方向のヘラミガキ。 内面—赤色塗彩、横方向のヘラミガキ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R6/4)
4 (完)	壺	— — —	胴部は球状を呈する。	外面—頸部三連止めの簾状文を施し、その下位に振幅の浅い波状文。胴部赤色塗彩、横方向のヘラミガキ。 内面—ヘケ目調整	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R7/4)
5 (完)	壺	29 — —	口縁部は強く外反し、胴部は中位で緩く張る。	外面—口縁部・胴部に帯描波状文、頸部に三連簾状文、胴部下位に縦方向のヘラミガキを施す。 内面—横方向のヘラミガキ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R7/4)
6 (回)	壺	— — —	胴部は球状を呈する。	外面—口縁部・胴部に帯描波状文、頸部に二連止め簾状文、を施す。 内面—ヘラツズリの後ナデ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R7/4)
7 (回)	壺	11.7 — —	口縁部は強く外反し、胴部は球状を呈する。	外面—ミガキ? 内面—ヘラミガキ	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R6/4)
8 (完)	合付壺	— — —		外面—縦方向のナデ。 内面—横方向のナデ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R6/4)
9 (完)	高杯	— — 11.4	胴部はラッパ状に開く。	外面—赤色塗彩、体部横方向・脚部縦方向のヘラミガキ。 内面—体部赤色塗彩、横方向ヘラミガキ。脚部横方向ナデ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R7/4)
10 (完)	鉢	16.3 7.6 (4.5)	体部内湾気味に開く。片口を有する。	外面—赤色塗彩、口唇部横方向・体部縦方向のヘラミガキ。 内面—赤色塗彩、横方向ヘラミガキ	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R7/4)
11 (完)	鉢	(14.4) 7.4 5.3	体部内湾気味に開く。	外面—赤色塗彩、ヘラミガキ 内面—赤色塗彩、横方向ヘラミガキ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R7/4)
12 (回)	鉢	(15.8) 7.9 (5.0)	体部内湾して開く。	外面—赤色塗彩、口唇部横方向・体部縦方向のヘラミガキ。 内面—赤色塗彩、横方向ヘラミガキ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R7/4)
13 (完)	鉢	14.1 5.8 4.0	体部内湾気味に開く。	外面—赤色塗彩、口唇部横方向・体部縦方向のヘラミガキ。 内面—赤色塗彩、横方向ヘラミガキ	胎土は砂粒を含みによい黄褐色 (10Y R7/4)

(単位cm)

第4表 Y-1号住居址出土石器一覧表

押出番号	機種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
25	石	燧石	18	12	3.5	0.6	
26	敲石	頁岩	123	78	51	711	
27	敲石	頁岩	96	75	33	329	
28	敲石	安山岩	135	66	42	427	
29	敲石	安山岩	78	69	51	443	
30	磨石	砂岩	69	51	25	117	
31	磨石	安山岩	120	120	36	674	

(単位mm, g)

(2) Y-2号住居址

住居址 第16図

本住居址はD-4・5グリッドにおいて検出された。その南側の一部をM-2号溝状遺構に切られている。また南側の壁は攪乱により破壊されているが床面の掘り込みが残っていたため本址の規模はほぼ知りえた。東西5.7m、南北9.2mの隅丸長方形を呈し、床面積44.3㎡を測る大形住居である。長軸の方位はN-27°-Eを指す。壁の残存高は20~40cmを測る。床面は貼り床が施されており壁溝は認められない。ピットは支柱穴と考えられる3個が検出された。長方形に配置されたと思われるが、南東隅のピットは精査したが検出できなかった。P1は40×25×38cm、P2は45×35×40cm、P3は50×30×40cmを測り、いずれも平面形は東西に長い楕円形である。また貼り床下からはピット3個(P4~P6)が検出確認された。

住居覆土は4層に分層された。I層はローム、軽石等は含まない黒色土(10YR2/1)、II層はロームと小粒の軽石(径5~20mm)を含む暗褐色土、III層は小粒の軽石を含む黒褐色土(10YR2/2)、IV層はローム・小粒の軽石を含む暗褐色土(10YR3/4)である。

炉 第15図

炉は北側の支柱穴間に設けられる。床面を50×40×15cmの楕円形に掘り込みNo.1の土器が設置されていた。また炉の南側の貼り床中には川原石が置かれていて、炉址のII層中には焼土が多量に含まれるためはじめは地床炉として使用されていたものかもしれない。

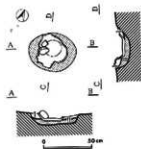
本炉址の覆土は2層に分層された。I層は炭化材・灰を少量含み、多量の焼土を含むふい赤褐色土(5YR4/4)、II層は炭化材を少量含み、焼土を多量に含む極赤褐色土(5YR2/4)である。

この他にP3の北側の貼り床下より炉址が検出されたがこれは旧炉と思われる。地山を掘り込んでNo.2の土器が設置されていた。

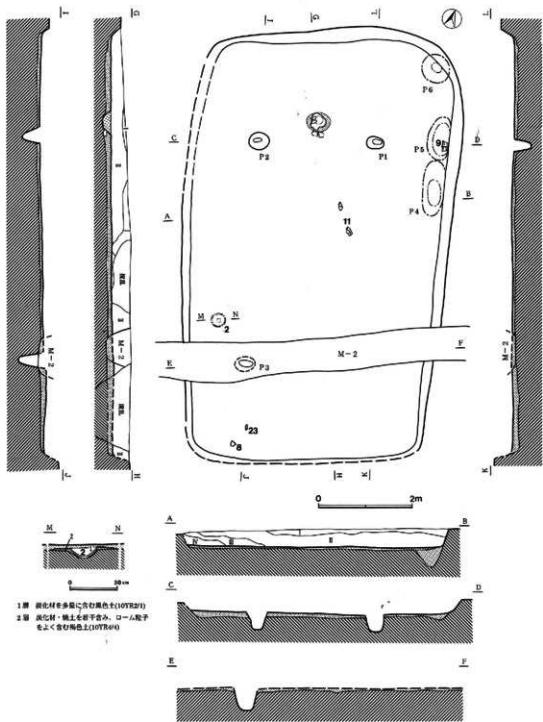
遺物 第17~19図・第5・6表

出土した土器は壺・甕・台付甕・鉢などである。No.1・2はそれぞれ前述したように炉址から出土している。No.8の小型の甕は南西の壁際から床面上から出土した。完形品だが土圧により著しく変形している。またNo.9の台付甕は東の壁際の床面上に押潰されていた。脚部を除きほぼ完形品である。No.11の鉢は住居址中央部の床面上に散っていた。

壺は口縁部と胴部下位から底部にかけてのもので胴中央部は出土していないがおそらく胴部が膨らむ器形とおもわ

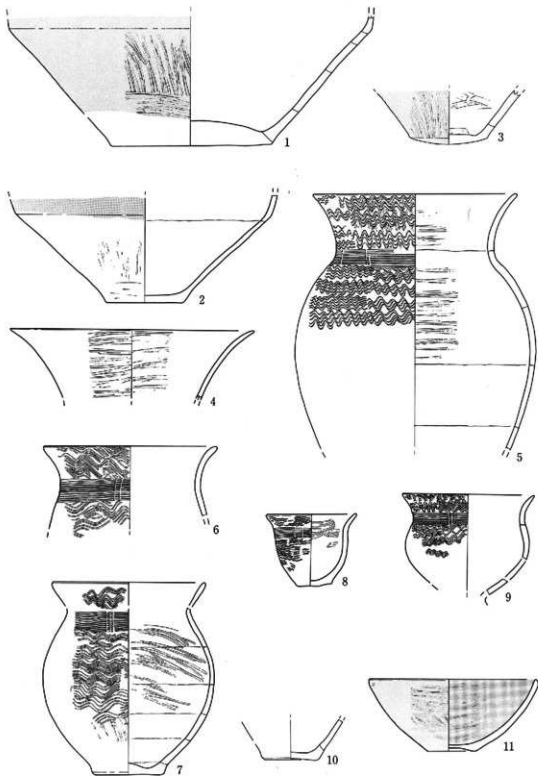


第15図 Y-2号住居址炉(1:40)

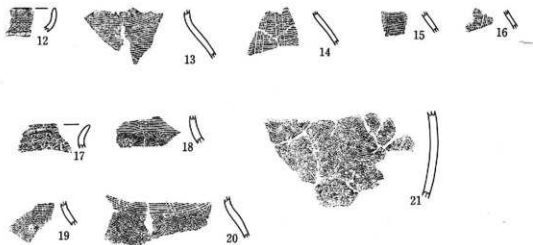


1層 炭化材を多量に含む褐色土(10TR21)
 2層 炭化材・焼土を若干含み、ローム粒子
 をよく含む褐色土(10TR40)

第16図 Y-2号住居址(1:80)



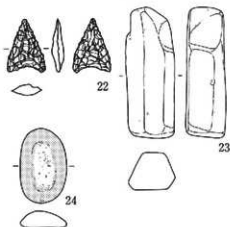
第17图 Y-2号住居址出土土器(1:4)



第18図 Y-2号住居址出土土器拓影図(1:4)

れる。平底 (No.1・2) と丸底 (No.3) がある。No.2 と No.4 の器厚は薄く No.4 の口縁部には赤色塗彩はみられない。甕はいずれも単純口縁で胴部中位が膨らむ特徴がみられる。文様は口縁部から胴部にかけて櫛描波状文が施された後に頸部に簾状文が施される。No.1 の鉢は赤色塗彩が施される。拓影図 (第18図) の No.12 は小形の壺の口縁部で波状文が施された後赤色塗彩がなされる。No.13~16 は壺の頸部とおもわれ T 字文がみられる。No.17~21 は甕で頸部に簾状文、口縁部と胴部に波状文が施される。

石器はチャート製の石鏃や磨石等が出土している。



第19図 Y-2号住居址出土石器
(22=2:3, 他は1:3)

第5表 Y-2号住居址出土石器一覧表

標記 番号	機種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
22	石 鏃	チャート	20	16	5	1.1	
23	磨 石	砂 岩	60	36	13	45	
24	磨 石	頁 岩	105	39	33	217	

(単位cm, g)

第6表 Y-2号住居址出土土器観察表

押図 番号	機種	法量	器壁の特徴	文 様 お よ び 調 整	備 考
1 (完)	壺	— — 16.5	胴部下位は挟れる。	外面—赤色塗彩、ヘラミガキ。 内面—ナデ?	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10Y R7/3) 器内面の剥落顕著
2 (完)	壺	— — 8.2	胴部下位は挟れる。	外面—赤色塗彩、縦方向のヘラミガキ。 内面—ナデ?	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10Y R7/4) 器内薄い。
3 (完)	壺	— — 8.2	胴部下位は挟れる。	外面—赤色塗彩、縦方向のヘラミガキ。 内面—ハケ目調整	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10Y R7/3)
4 (回)	壺	(26.0) — —	口縁部は緩く外反する。	外面—横方向のヘラミガキ。 内面—横方向のヘラミガキ	胎土は砂粒を含み明黄褐色(10Y R6/6)
5 (回)	甕	21.8 — —	口縁部は緩く外反し、胴部は中位で軽く膨らむ。	外面—口縁部はハケ目調整の後帯波状文、胴部に帯波状文、頸部二連止め帯状文を施す。 内面—横方向のヘラミガキ	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10Y R7/4)
6 (完)	甕	18.5 — —	口縁部は緩く外反する。	外面—口縁部・胴部に帯波状文、頸部に二連止め帯状文。 内面—ミガキ?	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10Y R7/4)
7 (回)	甕	— — 7.5	胴部は球状を呈する。	外面—胴部上位に帯波状文、下位に縦方向のヘラミガキ。 内面—ヘラミガキ	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10Y R7/4)
8 (完)	小型壺	(8.5) 7.6 4.0	口縁部は緩く外反する。	外面—口縁部・胴部上位に帯波状文、胴部下位に縦方向のヘラミガキ、頸部に二連止め帯状文。 内面—横方向のヘラミガキ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10Y R7/4) 土匠により著しく変形する。
9 (完)	台付甕	14.0 — —	口縁部は緩く外反し、胴部は球状を呈する。	外面—口縁部・胴部上位に帯波状文、頸部に三連止め帯状文。 内面—横方向のナデ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10Y R7/4) 外面の剥落著しい。
10 (完)	甕	— — 6.0		外面—ナデ? 内面—ミガキ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10Y R7/4)
11 (完)	鉢	18.0 7.7 5.3	体部内湾して開く。	外面—赤色塗彩、ヘラミガキ。 内面—赤色塗彩、ヘラミガキ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10Y R6/4)

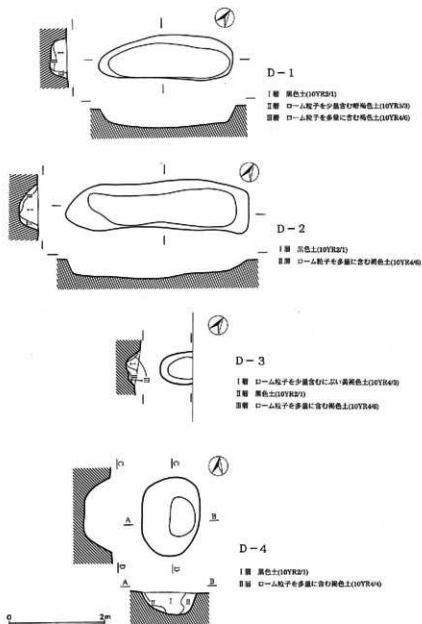
(単位cm)

時 期

土器様相から本址は、弥生時代後期後半に帰属すると考えられる。

(3) 土 坑 第20図

本遺跡からは4基の土坑が検出された。いずれも遺物は殆ど検出されなかった。このため時期・機能等は不明であるが、D-4号土坑は位置的にY-1号竪穴住居址に関するものであろうか。



第20図 D-1~4号土坑 (1:80)

(4) 溝状遺構

M-1号溝状遺構 第21図

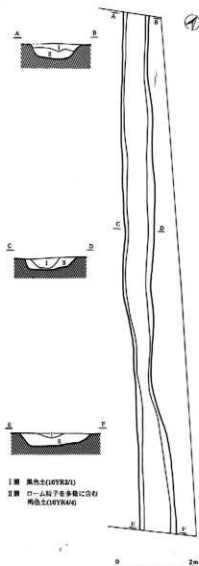
本址はG・H-1・2グリッドにおいて検出された。重複関係は持たない。検出長15mで北西から南東に伸びている。幅は60~80cmで深さは15cm前後を測る。覆土には砂層等水の流れた痕跡は観察されなかった。

遺物は検出されなかった。時期・機能等は不明である。

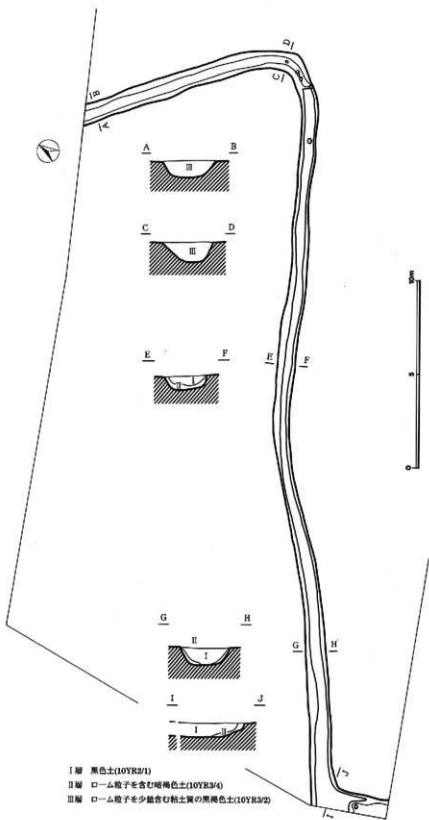
M-2号溝状遺構 第22図

本址はB-E-3~6グリッドにおいて検出された。北西から南東に伸びた後90度向きを変え途中でY-2号竪穴住居址を切って南西に40m程直進したのち再度90度向きを変えて南東に伸びている。幅は70~120cmで深さは20~40cmを測る。覆土のIII層はグリッドにおいて本址及び本址の周りを広く被っている粘土質のもので、氾濫による物とおもわれる。なおグリッドのコーナー部においてIII層上部に10~20cm程の礫が5~6個みられた。またグリッドのコーナー部分は抉られたように深くなっている。以上の事から砂層等は観察されなかったが、水が流れていたものとおもわれる。

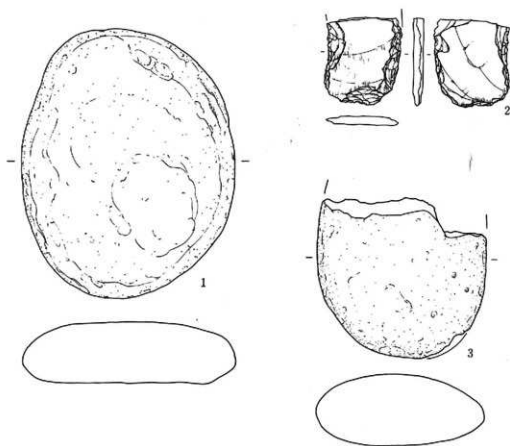
遺物は弥生時代後期の赤色塗彩された壺の破片が数点と第23図Na.1の磨石等が出土した。本址の時期・機能等は不明である。



第21図 M-1号溝状遺構 (1:100)



第22図 M-2号溝状遺構 (1:200)



第23図 溝状遺構出土・表面採集石器 (1, 3 = 1 : 4 · 2 = 1 : 3)

第7表 溝状遺構出土・表面採集石器一覽表

標 本 番 号	機 種	材 質	長 さ	幅	厚 さ	重 量	備 考
1	磨 石	安 山 岩	285	225	65	6400	M-2 出土
2	打 製 石 片	頁 岩	69	60	7	46	表採
3	磨 石	安 山 岩	170	180	76	3018	表採

(単位mm, g)

IV ま と め

今回の原遺跡発掘調査は調査面積約1,200㎡と遺跡全体の一部であったが弥生時代の住居址2軒(Y-1・2号住居址)を検出することができた。この2軒の住居は隅丸長方形を呈し、長軸長9m余りで佐久平における平均的な弥生時代の住居(5~6m)に比べ大形である。未調査部分にはおそらく何軒かの住居址が残り集落を形成しているものとおもわれ、本址はその大きさから集落の中で中核的な位置を占めていたとおもわれる。本址から出土した土器は器形の相似性では既存の編年案(小山 1999)の後期IV期に最も近く佐久平の弥生時代が終焉を向かえる直前の土器と考えられる。

現在、浅科村には五郎兵衛新田という優良米の産地があるが、稲作が始まったとされる弥生時代には本集落の経営した水田等の耕作地は何処に広がっていたのであろうか。本遺跡は千曲川を望む台地のへりに位置しており、耕地の利便性を考えると佐久平寄りの鳴瀬、あるいは塩名田方面にひろがっていたのかもしれない。今回の調査では調査面積も僅かで検出された住居址も2軒のみであったが、浅科村においては発掘調査による弥生時代の住居址の検出例は土合遺跡に1軒みられるのみで本遺跡は貴重な資料といえよう。

引用参考文献

- 佐久考古学会 1990 『赤い土器を追う』
長野県考古学会 1999 『長野県の弥生土器編年』
御代田町教育委員会 1993 『細田遺跡』



図版 1

原遺跡全景



図版2

Y-1, 2号住居址とM-2号溝状遺構



Y-1号住居址



Y-1号住居址遺物出土狀態



Y-1号住居址P4



Y-1号住居址 炉



Y-1号住居址 炉



Y-1号住居址 炉



Y-1号住居址 遗物出土状态 (No.9)



Y-1号住居址 遗物出土状态 (No.28)



Y-2号住居址

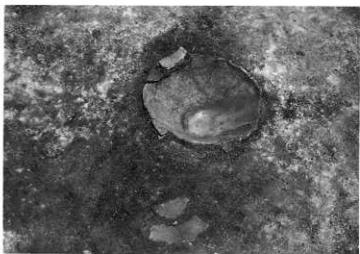


Y-2号住居址 炉



Y-2号住居址 炉（掘り方）

Y-2号住居址 旧炉



Y-2号住居址遺物出土状態
(No.9)



Y-2号住居址遺物出土状態
(No.8, No.23)

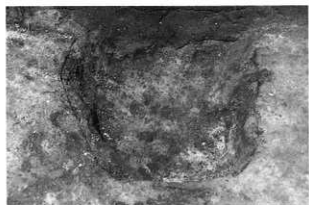




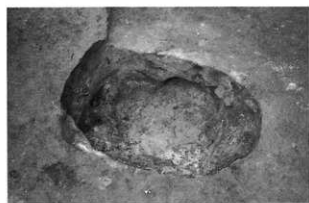
D-1号土坑



D-2号土坑



D-3号土坑



D-4号土坑



M-1号溝状遺構



M-2号溝状遺構 (北方より)



M-2号溝状遺構 (西方より)



M-2号溝状遺構 (東方より)



Y-1 1



Y-1 2



Y-1 3



Y-1 4



Y-1 5



Y-1 8



Y-1 9



Y-1 10



Y-1 6



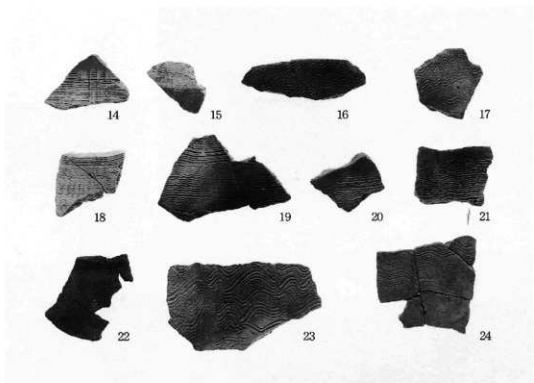
Y-1 11



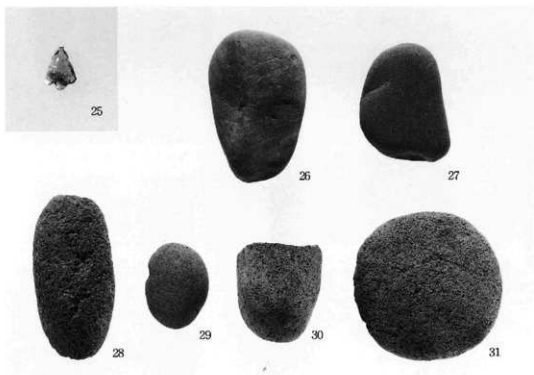
Y-1 7



Y-1 12



Y-1号住居址出土土器 (1:3)



Y-1号住居址出土石器 (25=2:3, 他は1:3)



Y-2 1



Y-2 3



Y-2 2



Y-2 4



Y-2 5



Y-2 6



Y-2 7



Y-2 8



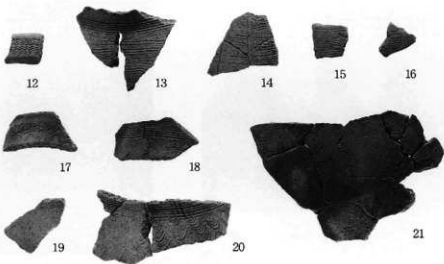
Y-2 9



Y-2 10



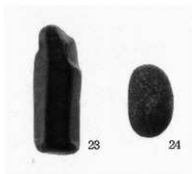
Y-2 11



Y-2号住居址出土土器 (1:3)



Y-2 22 (2:3)



Y-2号住居址出土石器 (1:3)



表面採集石器No.2 (1:3)



表面採集石器No.3 (1:4)



試掘調査風景



作業風景

報告書抄録

ふりがな	はらいせき							
書名	原遺跡							
シリーズ名	浅科村歴史文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編者名	鳥居 亮							
編集機関	浅科村教育委員会							
所在地	〒384-2104 長野県北佐久郡浅科村甲1399 TEL 0267 (58) 2001							
発行年月日	2001年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
原遺跡	浅科村 大字塩名田 字入道	3,254	11 (村番号)	36°15'40"	138°25'35"	平成12年 5月1日 ～ 6月30日	1,200㎡	宅地開発事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
原遺跡	集落址	弥生時代 後期後半	竪穴式住居址 2軒 土坑 4基 溝状遺構 2基		弥生土器 (槽溝水式) 石器			

浅科村文化財調査報告書

- 第1集 【土合1号墳の調査】(1969年)
第2集 【矢鳴城跡】緊急発掘調査報告書(1985年)
第3集 【五郎兵衛用水】矢鳴城跡腰曲輪部に開した用水路の調査(1987年)
第4集 【矢鳴城跡】第2曲輪部の建築遺構(1988年)
第5集 【矢鳴城跡】主郭部の試掘調査(1991年)
第6集 【砂原遺跡】洪水に埋もれた耕地と古代の村(1993年)
第7・8集 【矢鳴城跡】村道2-8号線道路改良工事に伴う発掘調査(1996年)
第9集 【御馬寄古城跡】村道北-50号線道路改良工事に伴う発掘調査(1996年)
第10集 【寺田遺跡】古東山道・中仙道沿いの村(1995年)
第11集 【入の沢遺跡】村道悪地山線農道改良工事に伴う発掘調査(1997年)
第12集 【大平遺跡】(1998年)

浅科村文化財調査報告 第13集

原 遺 跡

発行 2001年3月

発行所 浅科村教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
